

小学校6年 『SEED なやみのたね』で多面的、多角的に考え、議論する道徳 ～番組から感じ取ったことを話し合う活動を通して～

川崎市立富士見台小学校 宮崎 誠

【実践報告の概要】

平成30年度より道徳が「特別の教科 道徳」となり、「考え、議論する」ことを通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てることが求められている。『SEED なやみのたね』は子供たちの知らない現実的な「なやみ」が、ドキュメンタリー形式でまとめられている。今までは子供たちが当たりまえで「これが正しい価値」と考えていたようなことでも、多面的、多角的に見るきっかけを与えてくれる番組である。本実践では、番組をきっかけにして子供たちが葛藤しながら考えを伝え合う場面を設定した。

【取組の具体】「・」は実際の子供の記録より

◎社会における差別や偏見について考え、公平、公正な態度を養う。【公平、公正、社会正義】

導入

「きまり」について自分たちが考えることを話し合う。本時以前にもあつかった題材を振り返ることで既習を確認し、今の自分の考えをGoogleドキュメントに書く。

- ・きまりは守らなくてはいけない
- ・きまりはみんなの安全のためにある
- ・きまりはみんなが守るもの

番組の視聴

『SEED なやみのたね』第2回
「千葉さんのなやみ ～犯罪を犯した人たちを支援しているけれど…～」を視聴し、考えたことを、Googleドキュメントに書く。

話し合い

番組について考えたことを、子供同士で伝え合う。伝え合ううちに、話し合いの柱は次のようなものになっていった。

「社会は、犯罪を犯した人たちを支援すべきか」

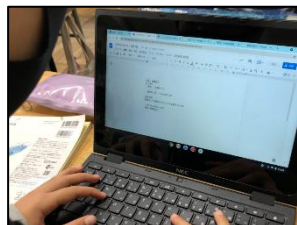
きまりを破ってしまった人たちに対し、社会はどうあるべきか考える。友達のを聞きながら考えたことを再びGoogleドキュメントに書く。

- ・犯罪を犯したのはその人の責任だから、差別するのはだめだと思うけど、支援しなくてもいい
- ・刑務所から出てきてもしっかり反省をしていれば支援してもいいと思います

終末

話し合いを受けて、考えたことをまとめる。

- ・きまりは守らないと社会から避けられるのが一般的だと思っていたけど、生きるために仕方なく行ったかもしれない
- ・ちゃんと反省しているなら支援してもいいと言って人がいたけど、それだと反省している人としていない人を区別できないと思うから難しいと思った



【活用番組と実践者による番組分析】

『SEED なやみのたね』第2回

「千葉さんのなやみ ～犯罪を犯した人たちを支援しているけれど…～」

刑期を終えた受刑者の方が、日常を取り戻そうとしてもなかなかうまくはいかない。「きまり」を破った人に対して、世間はとても厳しい。一方で支援をしようとする人がいる。「再犯するしかない」という描写もある。「きまり」ということについて、多くの子供たちに新しい視点を与え、対話を促す番組である。

【本実践における工夫点】

既習を生かす

6年生になるまで、「きまり」については何度も考える場面があり「みんなのためにきまりはある」「きまりは守って当たり前」という価値をもっている子供が多い。そうした考えから、番組のように社会できまりを守れなかった人に対する差別的な意識がある。「きまり」は守らなくてはいけないが、破った人に対してどう考えたらよいか話し合う機会になった。

GIGA 端末の活用 (Google ドキュメント)

GIGA 端末に記録することで、共有することができ授業後にもお互いに考えを確認できる。他教科においても情報を共有する活動を行っている。

番組から感じたことを素直に話し合う

本時では、はじめに「きまり」について振り返る時間以外は、子供同士での対話によって授業を展開した。番組の力で「きまりは守るもの」「守らないことは悪いこと」というものだった「きまり」を多面的、多角的に見ることで、きまりを守れなかった人に対しての新しい気づきと出会わせたいと考えた。

【本実践の成果と課題】

番組を視聴することで多くの子供が今まで考えたことのなかった差別について考えることができた。一方で、子供の思考を身近な生活のできごとに十分に結び付けるには、教師の支援が足りなかった。『SEED なやみのたね』は、普段多くの子供が体験できないと感じ取ることができる番組である。番組の視聴を通して「考えたこともなかった」「そんな見方があったのか」と感じ、例えば本実践なら「よく廊下を走っちゃう子はみんなにどう思われているか」という、身近な場面について考えさせ、実生活に生かせるようにしたい。